

# 日隆聖人の殉教精神

株 橋 諦 秀

## 目 次

一、日隆聖人出世当時の宗門教義……………	三七
二、日隆聖人の殉教的事歴……………	三〇
三、日隆聖人闡揚の宗義……………	三三
四、日隆聖人の折伏義……………	三五
五、日隆聖人と日典上人……………	三九

## 一、日隆聖人出世当時の宗門教義

わが法華宗再興唱導師日隆聖人の出世は室町時代の初期に当り、至徳二年（一三八五）（A<sub>n</sub>一〇四）より寛正五年（一四六四）（A<sub>n</sub>一八三）に至る八十年間である。この聖人出世の時は恰も宗門としては宗祖滅後第一期の宗義暗黒時代であつて、宗祖大聖人の正義が中古天台の自然本覚の理体思想によつて隠蔽されていた時代であつた。即ち宗門第三祖帝都開教の日像聖人

日隆聖人の殉教精神

が京洛に布教戦線の第一步を印してから後本宗が西漸した為、地元の比叡山の天台宗と軋轢を生じ宗号問題などが発生し、これが為に本宗としては此に於て宗義的に天台宗との相異勝劣を明らかにして宗祖の本義を主張しなければならぬ状態に立ち至つたのである。ところが宗祖滅後より南北朝に至る鎌倉末期の本宗の状態としては宗祖畢生の大題行たる国家諫曉の運動に主力を注ぎ、傍ら関東方面に於て念佛・禅・律・真言等の権宗対破の布教に活躍していた。従つて此の如き国家諫曉と権宗対破とに於てはその活動原理として宗祖自身の大事たる本迹勝劣の宗義までも表面に発揚する必要もなく、教判としては単に権実相對を以てし、台家（天台、伝教両大師等の正統天台）与同の立場に於て活動すればよかつたのであつた。このような状態であつたから宗祖の滅後、宗祖の直弟並にその弟子たちが次々と入滅するに及んで漸く本迹勝劣の正義が忘却されて行つた。即ち南北時代に入つて天台宗との間に問題が生じたが、直ちに宗義的に彼宗と此宗との相異勝劣を明らかにすることができなくなつてゐる。天台・法華両宗の勝劣を明らかにする為には、彼此両宗の宗義何れをも理解してはならない。此に於て本宗の僧の間には急激に台当両家研究の機運が生じ、台家の研究を欲する者は多く比叡山が関東仙波に行かなければならなかつた。ところが此方に本宗の正しい教義を明確に把握していない者が、彼の天台宗に行けば全く天台宗の教義をそのまま受容するのは理の当然である。当時の天台宗の宗義は天台・妙楽・伝教等の正統天台ではなく、慈覚・知証を源流として其後誤つて来たところの中古天台と称する謗法天台であつた。

中古天台の教義とは一体何かといへば、修行を全然否定した自然法爾の本覚思想であつて、われら凡夫は修行しなくても本来佛である、修行し実相を証得すればそれはもはや本覚佛ではなく始覚佛なのである。仍て諸法実相鈔に

凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏（釈迦）は用の三身にして迹佛なり。……本佛というは凡夫なり、迹仏とい

うは佛なり。迹佛というは佛（釈尊）なり。

（この文は恐らく宗祖御自身の義ではあるまい。小納はこの抄全体を宗祖の撰述とすべきか否か疑問をもっている）

とあるが如く、釈尊のように久修業所得して成仏した始覺佛よりも、なんらの修行もせず、本然のままのわれわれ凡夫の方が本覺佛であつて、この方が勝れているのだと主張する。然らば何故われわれ無智悪人の凡夫が尊いのかといえは凡夫は本来理性に三千実相を具足しているからである。その本有の実相を天真独朗の止觀といつてゐる。故に本来本然の止觀（実相）は教典として説き顯された法華經よりも勝れている。仏陀釈尊は天真独朗の止觀を法華經という教説に顯したのであるから止觀が根本で法華經はその所生である、これがいわゆる止觀勝法華の法門で彼等が好んで主張するところである。

かようにわが宗門の僧侶が天台宗側へ研究に行つて彼の習損いの中古天台の教義を嚙呑みにして歸つて来る、ミイラ取りがミイラになつてしまふ、このような連中が「これが宗祖大聖人の法華教義だ」などと解説弘通するのだからたまつたものではない。このような天台ぶりの実相主義を立てれば従つて本迹一致の無勝劣主義になり、宗祖が

夫れ佛法と申すは勝負（能開所開）を先と為す。（告誡書）

抑々俗諦真諦の中には勝負を以て詮と為し、世間出世とも甲乙を以て先と為すか。（大田殿許御書）

等といわれている勝劣主義に反することとなる。宗祖の本意は無勝劣平等の上の勝劣主義であつて、天台ぶりの差別を超えた平等主義ではないのである。ここが宗祖大聖人の本迹勝劣なのである。

されば此の如き実相本意の中古天台の思想をそのまま受容し踏襲した当時の諸法華宗の本迹一致説を徹底的に破して、宗祖出世の本懐たる本迹勝劣、本門八品、上行要付の要法たる南無妙法蓮華經を顯揚せられたのが、わが日隆聖

人であつて、それは恰かも闇夜の中に輝く一大灯明であつたのである。

## 二、日隆聖人の殉教的事歴

日隆聖人の一代の事蹟について見るも、全く本迹一致思想の破斥と本勝迹劣本門八品の闡揚との本門的な破邪顕正の生涯に終始せられたことが理解される。その事蹟中主なるものは妙本寺の革正と三千余帖の大著との二大事蹟だといへども差支へあるまい。前者は本迹一致に対する破斥運動であり、後者は本勝迹劣本門八品義の記述事業である。今聖人の殉教精神を頭さんが為に煩を厭わずにその事歴を略述しよう。

聖人は至徳二年十月十四日生誕、父は越中国浅井郡島村の城主桃井右馬頭尚儀、母は足利管領斯波義将の女益子であつて、幼名は長一鷹、十二歳にして同国の遠成寺に入り住持慶寿院を師として得度、名を深円と改めた。深円は行学共に衆に秀で既にこの北越の辺地に問うべき師がないので、十四歳にして笈を負うて上洛、帝都開教の日像聖人の開基たる妙本寺に入り日霽上人を師とし名を慶林房日立（後に日隆と改む）と改称して同門の先達日存日道両聖人の指導を受けて日夜如教研鑽、大いに佛道修行に励まれ、宗祖大聖人立宗の本意並に像門相承の秘奥を極められたのである。

妙本寺はもと後醍醐天皇の御感に預つた勅願所であつて、当時皇室との関係も深き上寺僧も多くいてなかなか大寺であり、加うるに寺主日霽上人は資性温厚、僧衆の非を指彈することがないので、山規はますます無視せられ拾収すべからざる状態であつた。よつて日隆聖人は存・道両上人と共に霽師をしばしば諫言申したが聞容れられず、応永七年一時退山、存・道二師並に仏性院日慶師と共に日像聖人上洛宣教の根拠地たる妙本寺を復興せられたのである。此に於て聖人は存・道二師と共に大いに宗義の研鑽にこれ努め、ここに始めて宗祖大聖人の出世の本懐、像門の正統た

る本迹迹劣、八品所頭、上行要付の宗旨を唱導せられたのである。

その後応永十二年十月齋師遷化せらるるや、妙本寺に具覚月明が寺主となり、彼は貴頭紳士と盛んに交際し、俗權に媚びて自らの勢力伸張せんことのみを欲していた為、仏法の本領は全く忘却されてしまったのである。そこで日隆聖人は存道二師と共に月明を忠諫したが良薬口に苦苦諫言耳に逆ろうの道理で、彼は頑として聞容れず、仍て三師は決然妙本寺を去つた。而して応永二十二年本門八品上行要付の題目弘通の根本道場として本能寺を建立せられたのである。

応永二十五年三師は月明の請を容れて一時妙本寺に帰山し同寺の肅正を画し本迹勝劣の正義を論じたのであるが、月明は一向に本迹一致の邪義を捨てず、その非行をも反省せる色さえ見えないので、同志二十余名と共に此処を退き、存・道二師は内野の草庵に、日隆聖人は本能寺に於て本迹勝劣の宗義を顕揚し、天台づりの本迹一致の謬義破斥の法陣を張つたのである。ところが月明は日隆聖人等のこの行動を恨み聖人を無きものにしようと一夜遂に腹心の六人の劍士を選び聖人の居たる大乘坊を襲わしめたのである。その六人の劍士とは吉川勝十郎、水野半左衛門、西尾宮内、田中藏人、桜井彦十郎、尾崎伝内である。この六人が居室を窺っていると、聖人は肅然と端坐合掌し床にかけられた大曼荼羅本尊に向つて、「一心欲見仏、不自惜身命、時我及衆僧、俱出靈鷲山……」等と自我偈を誦誦されている。その威容たるや実に崇高で犯し難く、六人の曲者もしばらく躊躇逡巡した。しかし時刻はいよいよ迫る。六人は遂に思切つて拔身をかざして踊りんだ。「エイイッ」、今方に刀を打下ろそうとしたその瞬間、「何者だッ」、するどい一喝、その沈勇堅忍不拔の大信念にはさすがの毒刃も役にたたない。曲者は煌々と輝出づる大曼陀羅の光明に眼もくらみ無意識に刀を放り出し、「赦したまへ」と平伏してしまつた。邪法を信する怨敵に取り囲まれて而も泰然自若、聖人の

偉大な様は実に身軽法重死身弘法の殉教的勇者である。六人の法敵は宗祖の本意は本迹勝劣の教判にあること、その教判によつて詮出される教法は本門八品所顯上行要付の南無妙法蓮華經であること、この南無妙法蓮華經こそ末法相應、名字信者の下種の要法であることなど諄々と説き示されて、全く迷雲が晴れて始めて正法の信仰に目覚めたのである。本然の佛心に立還つた役等の両眼には法悦の露が光り、ここに改心懺悔し端坐合掌、曼陀羅に向つて声を張り上げて願目を合唱するその容姿は全く求道そのものであつた。六人の中吉川勝十郎、水野半左衛門の兩名は即座に落髮、聖人の弟子となり、他の四名も信者となつて後聖人の遊化に随伴給仕し、河内の三井村に留つて題目信仰を続けられ、今にその子孫は法華經の信仰に励んでいるのである。この法難の時三十四、かつて宗祖大聖人が竜口に於て「及加刀杖者」の怨嫉を体験せられてから実に百四十八年目、聖人また刀杖不加の金言を如実に色説せられたのである。法華宗再興唱導師とは亦宜なるかな。

その後聖人は三井村の遊化より摂津尼崎に転じ、城主細川右京大夫満元の外護を得て本興寺を建立し、本門八品上行要付の最勝佛法研鑽興立の根本道場とせられた。

此に於て本門八品上行要付の最勝仏法の弘通と研学の能興両大本山を都鄙に構へられたのである。

後北陸に西国に諸方に広く化を垂れ、或は新たに本宗寺院の建立に、或は余宗寺院の改帰に、或は道俗四衆の教化に尽され、その後は宗祖の折伏が家の摂受を倣い、尼崎本興寺に於て専ら教義の研究と子弟の養成に力を致し、晩年は滅後の衆生を化せんが為に三千余帖と称せられる日蓮門下前代未聞の大著を完成せられた。かくて寛正五年二月二十五日門弟信者説経唱題の裡に安祥として帰寂せられたのである。春秋重ねること八十。ここに法華宗再興の則如来使の生涯は終に幕を閉ぢたのである。

### 三、日隆聖人闡揚の宗義

さて此の如き偉大な日隆聖人の殉教的精神を培つたその基盤となつた聖人所懐の宗義を述べてみよう。

宗祖大聖人の重要教判たる本迹勝劣の義は、観心本尊抄・開目抄等の主要御書を始め諸御書の中に顕説されているところであつて、日隆聖人は

本迹勝劣と云ふは法華宗の寿命なり。(弘經抄七六)

といつておられる。而して本宗に本迹勝劣を主張する所以を説いて

問ふて云く、当宗に本迹勝劣を以て宗旨と為すや。答ふ、下種種子を顕さんが為なり。下種の本尊既に本門八品にあり、此の八品所説の下種の本尊を顕さんが為に堅く本迹勝劣を云ふなり。……

本迹は下種種子を顕し、父国王(本仏釈尊)を顕し、

本因妙の種子を顕し、総名を顕し、易行を顕すと口伝するなり。云云(弘經抄四〇)

といわれている。即ち、本迹勝劣の教判は末法下種の種子たる三大秘法総在の南無妙法蓮華經を顕さんが為である。

その南無妙法蓮華經は正しく本門八品に詮顕せられ上行菩薩に付囑された大法で、これが末法の順逆信謗の両機全体を下種成佛せしめる易行の大法であるというのである。

ここにいう本迹とは実相の上に於ける本迹を意味するものではなく、時間の上に於ける本迹、教法の上に於ける本迹であつて、日隆聖人は

本迹と云ふは久近を以て実体と為すなり。謂く迹は近なり、本は遠なり。(弘經抄二)

といつておられる。即ち久遠本地の本仏所説の根本一乗を本とし、迹中の三世十方諸仏所説の小乗・權教・迹門等の諸教を迹とするのである。而して此の本迹は結局能開所開能生所生の關係である。聖人は

本迹相對するとき、当宗の意は迹を以て所開と爲し、本を以て能開と爲し、爾前迹門無得道の教なりと定む。

(私新抄一一)

と示されているのである。此の本迹の能積によつて判積された所積の仏法が即ち本門八品所顯上行要付の南無妙法蓮經であることは觀心本尊鈔に明らかなどころである。

この本宗正統の本迹勝劣の深義を知らずして中古天台の本覚無作の邪義を伝え、実相を以て本迹一致を唱えていたのが、当時のいわゆる諸法華宗であつたのである。日隆聖人は

日像聖人は「教觀の異を弁へずして開會觀心の法門を云ふべからず」等と示したもふ。貴き御教誠なり。この諸御抄の大意を得ざる諸法華宗は天台宗の如く觀心開會を好んで本迹一致を成ずる大謗法なり。(弘經抄四)

とも、また

此の如く止觀の本理の三千と諸御抄の事の三千とは大いに異なるを、諸門流往古より習ひ失ふて天台宗所得の一念三千を以て、諸御抄の神と爲すこと大謗法なり。(弘經抄八二)

とも仰せられているのである。

このような中古天台の理体本覚の邪義を踏襲して、これが宗祖の法華經觀だと心得ていた諸法華宗は当時盛であつたと見えて、聖人は

能開所開を混じて謗法を成ずるなり。此の邪義を口伝する諸法華宗滿々たり。(弘經抄七三)



といわれているのである。

日隆聖人が存・道二師と共に多年退山帰山をくりかえしながら執拗に妙本寺の革正を計り、月明に対してしばしば諫言を提したのは、敢て月明に対する単なる感情問題ではなく、全く宗祖日蓮大聖人の本義に復し、日像聖人の教誡に還らしめんとする破邪顕正の熱情より出たものであつたことは、「妙蓮寺内証相承血脉次第条目之事」によつて明らかである。而も単なる一人の月明、一ヶの妙本寺を目標に諫言せられたのではなく、一人の月明、一ヶの妙本寺を捨邪帰正せしめること自体、宗門全体覚醒運動であつたのである。

#### 四、日隆聖人の折伏義

日隆聖人は本迹勝劣の教判によつて判出された八品所顕上行要付は末法易行の南無妙法蓮華經を弘通せんとして懸命に活躍させられた。これが即ち京洛・河内・摂津・兵庫・北陸・西国等の伝道弘通である。十三問答抄の本門戒体を積するところに

折伏とは不輕の先証これあり。輕毀四衆の謗者は口を以て謗を起し、不輕は口を以て二十四字の妙法蓮華經を唱へて謗者の口に折り入れ逆縁を成ず。日蓮聖人又以て此の如し。又本門流通の末代は下種の時なり。下種とは名字即の位なり。既に妙名を唱ふ、故に名字即と云ふ間、口業を以て成佛を成ずる位なり。……聞法下種とは口業を以て之を説き之を聞かしめ下種を成ずるなり。

と記されているのは、単なる机上の空論ではなく、聖人の折伏弘通の体験の結晶であり、またこの弘通色説より生じた聖人自体の深き信念であつたといわなければならぬ。

そこで妙法蓮經の折伏弘通について對外、對内の二意あることは、宗祖の諸御書、殊に開目抄によつて明らかである。先づ對外的折伏は涅槃經に「若し善比丘ありて法を壞る者を見て置て呵責し驅遣し挙処せずんば、當に知るべし、是の人は佛法の中の怨なり。若し能く驅遣し挙処せば是れ我が弟子眞の声聞なり」とあるが如く、心ず謗者に對して呵責しなければならぬ。同抄には

謗者多き世には謗者呵責を以て持戒と爲すと云ふ事明鏡なり。爰に知んぬ、謗者多き世には山林に籠りて撰受を行じ謗者を治罰せずんば還て犯戒となるなり。何にも謗者を呵責せしめ三類に怨まれて退失の意なく、信心強盛なるは名字即の持戒なり。

と記されている。勿論謗法呵責の折伏に於て聖人は化儀の折伏と法体の折伏との両意を示されている。このこと四抄抄一、私新抄一一、弘經抄七二等に記されている。

化儀の折伏は常の如く口に四ヶの格言、諸宗無得道隨地獄の根源、法華獨一の成佛と唱え、また涅槃經の如く身に刀劍弓箭鋒槩等の武器を携えて謗者を呵責することであるが、法体の折伏とは常不輕菩薩の如く懸命に本地の根本一乘たる南無妙法蓮華經の要名を唱えて、不信・謗者の耳に入れ口に伝えて下種を成ずることである。口に四ヶの格言を唱えることも、身に刀杖弓箭を持つこともいらない。只高声に「本門八品上行所伝本因下種の南無妙法蓮華經」と唱えるばかりでよい。何となれば本門八品上行所伝の本地の南無妙法蓮華經は既に迹中小權迹等の諸教を破廢折伏して顯れ出でた大法であり、而もその大法体内には權実本迹の諸法を總撰し体内に於て能開所開本迹宛然として勝劣を顯して、謗者呵責の功能は既に題目体内に存しているのである。されば本門八品上行要付の題目を口唱すること自体、既に諸教諸宗無得道を宣言しているのである。

常不輕菩薩は常に「我深敬汝等不敢輕慢」等の二十四字の妙法を唱えて輕毀の四衆をして下種を成せしめたのであり、宗祖大士もまた建長五年四月二十八日の開宗の朝より弘安五年十月十三日の臨終の夕に至るまで実に一期三十年の間、他事なく只南無妙法蓮華經の題目を日本國の一切衆生の口に入れんと唱えて唱え死にせられたのである。宗祖自ら

彼の二十四字と此の五字とは其の語殊なりと雖も其の意これ同じ。(顯佛未來記)

と仰せられている。これ法体の折伏、眞実の折伏である。小柄は日隆聖人は化儀の折伏よりもこの本門法体の折伏を以て本懐とせられたように拝承するのである。

次に對内的折伏というのは、三類の怨嫉を忍受することによつて自らの過去無量の謗法罪を消滅することである。

これは開目抄や呵責謗法滅罪抄等に示されている宗祖の謗法呵責による滅罪觀を以て龜鑑としなければならぬ。今、呵責謗法滅罪抄の御文を引けば

日蓮は法華經の明鏡を以て自身に引き向へたるに都てくもりなし。過去の謗法の我が身にある事疑なし。此の罪を今生に消さずば未來争か地獄の苦をば免るべき。過去遠々の重罪をば何にしてか皆集めて今生に消滅して未來の大苦を免れんと勘えしに、当世時に當て謗法の人々國々に充滿せり。其の上國主(當時の政權保持者たる執權)既に第一の誹謗の人たり。此の時の重罪を消さずば何の時をか期すべき。……度々かかる事(弘通に對する迫害)出来せば無量劫の重罪一生の内に消えなんと謀てたる大術少しも違ふことなく、かかる身となれば所願も満足なるべし。

とある。法華經の行者不信・謗法の者を下種成佛せしめんの大慈悲の勇猛心を奮起して折伏の法体たる妙法蓮華經を以て彼等の謗法を呵責する。すると謗者怨嫉を生じてこの行者に大小種々の迫害を加える、その迫害の競起るは、謗者に逆縁下種を成せしめた証拠であると同時に、行者自らの過去の謗法罪の來報なのである。謗法の宿罪が發起しな

ければ何れの時にか消滅することができようか。故にこの折伏によつて峰起した種々の迫害を忍受すること自体が、自らの宿世謗法罪消滅の秘術である。宿世無量の謗法罪を今生の内一度に消滅せんとする方法は、万善万行能持諸悪能遮の功德を総在する総持陀羅尼の題目に過ぎたものはないのである。

かくの如き怨嫉追害の忍受が自身の謗罪消滅の最良方法であることは日隆聖人既に万々承知であることは多言を要しない。されば聖人は法華經の実体が「忍」なることを説いて

勸持品には「我等皆当忍」「皆当忍受之」と云て六ヶに「忍」と説けり。誠に末代惡世の不輕の行相は忍衣の弘經なり。其の土を「忍土」と云い、其の益を「得無生法忍」と云ふ。六度の中には忍辱行あり、諸戒皆忍行なり。されば法華經一部の実体をば「忍」の一字と習ふ仔細これあり。……法華經一部は忍法なり。忍法の故に爾前を捨てて法華經を取り、広を捨てて略を取り、略を捨てて要句を取る、要句を捨てて妙法蓮華經を取り、要法を以て正行と為すは減縁減行の如し。……此の義は日道の御義なり。(弘經抄四一)

と仰せられ、最要の忍經たる妙法蓮華經を以て謗法呵責の折伏行を修する出家を以て末代最勝の比丘僧とせられている。即ち

信心堅固にして如説修行抄の如く流罪死罪に行はれ、或は題目修行を致して勸持品の如く之を行す。是れ又最要の僧比丘なり。謂く信心堅固の故に身命財を惜まざる出家なり。不輕菩薩の如し。二十四字の体妙総在の南無妙法蓮華經を以て謗者に勧め自他信心の食を乞ふなり。(弘經抄一三)

といわれている。聖人の尼崎勸学院に於ける子弟教育の根本精神は、恐らくこの法難忍受を目標とする末代信心僧の養成にあつたことと思われるのである。

## 五、日隆聖人と日典上人

そこで思出されるのは種子島の領主種子島時氏の改悔を願ひ、島民全体を正法たる法華經に帰依せしめんとして不借身命の伝道、終に寛正四年（一四六三）四月二十一日夜半、同島城ヶ浜にて石子詰の法難を身読せられた殉教の偉聖日典上人である。上人は尼崎勸学院に於て文字通り十年一日の如く日隆聖人に師事し、随分と聖人より本地甚深の法門を伝受し、殊に不輕忍衣の弘經の尊さを重々心読されたことと察せられる。日典上人の旧宗は律宗であつたといふことであるが、上人が日隆聖人より律宗亡国の法たることについて一体如何なる法門を承つたのか。それについて今何等の文献も見当らないのでそのことを知る由もないが、恐らく左の如き内容の法門であつたらうと思われるのである。云く

正像二時の小権の諸戒は難行の戒なり。迹門の円戒なほ難行の戒に属す。況や当世の律宗の五篇七聚（小乗の二百五十戒）等皆悉く有名無実、虚無の瓦器戒なり。なほ戒の名を与ふれば破戒の義あるに似たり。当時は一同に無戒にして破戒なほなし。況や持戒に於てをや。末代時機相応の本門金器戒ばかり真実の戒なり。是れ真の一得永不失の円戒なり。之を以て彼を思ふに当世律宗等の諸宗は法華謗法の破戒なり。故に亡国の戒と云ふなり。（十三問答抄下）と日典上人がこの厳しい教を受けて帰郷し、これを全島律宗の領主を始め島民に聞かしたのであるから、慘刑に遭うのも当然すぎる程当然である。末僧たるわれらが想像するだも身ぶるいのする激しい忍衣の弘經であると同時に、われらいうに甲斐なき愚禿比丘に對する峻烈なる教訓である。尊しとも尊し。

終りに臨んで日隆聖人の法華宗の道俗に示された教誨を掲げてわれらの信心増進に供して擲筆する。

日隆聖人の殉教精神

此の名字の信者は事戒を用いず、一向に持経即第一義戒の理戒（總在戒たる妙法蓮華經）を用うるなり。信の裏の解は解其義趣の義なり。是れ無智が家の解智なり。分に事戒を用ふべきなり。分とは剃髮染衣の形と成り、『慚愧の心を起し六根懺悔等を用うるなり。……此の普賢經の意は常に』慚愧懺悔を成し、鎮へに滅罪生善の思慮を廻らし、散心を嫌ひ、定心を好み、殺盜姪妄を恐れて偏へに善心を好み、傍らに孔子老子の道を学び、思無邪の三字を心に懸け、忠孝の二字を糺し、世出世の道に入り、形の如き発菩提心これある人は信が家の解慧、事戒の一分なり

云云。（十三問答抄下）（昭三七、四、一記）